学校評価シート

東海市立加木屋小学校

住　　所　　東海市加木屋町編笠９番地
電話番号　　０５６２－３２－２２０７　　児童　６８０名
校 長 名　　新　美　　勲　　２８学級　（内　特支６）

○ 教育目標　校訓「元気で　仲よく　真剣に」
・心もからだも　たくましい子
・思いやりの心をもち，礼儀正しい子
・よく考え，自ら学ぶ子

○ 地域の特色　・地域行事が盛んで，学校と地域コミュニティ，保護者の連携が図られている。

中期目標	今年度の目標	評価方法（アンケート項目）	結果の分析	課題と対応策	学校関係者評価【実施日】令和7年2月12日	来年度の改善策（誰が何をどうする）
真剣に よく考え，自ら学ぶ子 ・意欲をもって学習に取り組み，ともに高め合い，確かな学力を身に付ける子の育成	基礎基本の定着	・アンケート 児童　2　授業は楽しく，よく分かる 教職員　2　よく分かる授業を実践している 保護者　2　先生は分かりやすい授業をしている	「授業が楽しく，よく分かる」と８５％を超える児童が回答しているが，昨年度よりやや数値が減少している。また，保護者全体では「教員は分かりやすい授業をしている」と感じている数値が８５％を越える結果となっているが，「よくあてはまる」と回答した保護者は昨年度に比べて減少している。ＩＣＴ機器を積極的に利用した取組を続けているが，学力調査の結果の分析結果や毎日の授業づくりについての反省をもとに，満足感・成就感のある授業を目指すことが必要である。	児童の主体的な学習の実現に向け，授業研究・教材研究に取り組み，引き続き，楽しく分かりやすい授業を目指す。ＩＣＴ機器の利用に関する知識や技能をさらに磨き，充実させることにより，児童自身が学びを自覚し，互いに高め合い，つながりながら学習が進められるように授業の質的向上に努める。また，基礎基本の定着のために，家庭での学習と連動しながら学習習慣を確立させる。	児童の「授業が楽しい，わかる」の回答は高い水準を維持しているが，昨年度よりも数値は下回っている。保護者も同様であり，授業づくりの工夫をより心がけていく必要が感じられる。子どもたちが分かる・できる・楽しいを実感できるような授業となるよう努めていただいているが，細やかな声かけや適切な配慮wをして苦手意識をもっている子たちも安心して学べる場をつくりながら，家庭との連携を図り，基礎基本を身に付けさせていってほしい。	ＩＣＴ機器の活用について，教務主任と現職研究主任を中心に，単元を通した活用場面やその効果的な使い方の研究を進めていく。また，子どもたちに分かる・できる・楽しいを実感させるような授業づくりのためにも振り返りの時間を重視し，教員の授業改善に役立てていくようにする。個々に応じた具体的な支援に目を向け，家庭と連携しながら基礎基本の定着を進められるようにする。
	意欲的な学習への取組	・アンケート 児童　4　授業では，進んで学習に取り組んでいる 教職員　4　児童は意欲的に学習に取り組んでいる	「授業に進んで取り組んでいる」と回答した児童は８６．６％で，昨年度に比べやや数値が減少している。教職員アンケートでは「児童，は授業に意欲的に取り組み，学力の向上に励んでいる」との回答は９０％を超える数値となっているが，「よくあてはまる」と回答した数値は低く，手応えを大きく感じているとは言い難い。児童の取組に対する様子と教職員の手応えとのギャップの原因を考え，見直すことが必要であると考えられる。	学習の質を高められるように，児童主体の学習を進め，自ら意見をもち，互いに高め合えるような授業づくりを推進していく。ＩＣＴ機器やタブレットも，児童の思考を深めることができるように，更に活用の仕方を工夫する。校内研修を設定したり，先進校の授業公開へも積極的に参加し，更なる授業力向上を図る。	児童は集中して授業に参加し，先生も児童の意欲を引き出しながら授業を進めている印象である。ＩＣＴ機器が取り入れられたことで，以前では予想もできなかったことが子どもたちの学習に普通に取り入れられている。ＩＣＴ活用の研鑽を先生も積まれていることが分かった。加木屋小学校は，筆記の学習とタブレット学習のバランスがちょうどよいと感じる。一方で，児童・教員とも10%前後の否定的な回答があるため，それぞれの立場での課題を抽出し，さらなる改善を図っていく必要がある。	算数科の少人数授業やTTを継続し，児童の主体的な学びを引き出す指導を工夫するとともに，教員の専門制を生かした教科担任制による質の高い授業を推進していく。担任が一人一人の児童のよさや努力を認め，子どもたち自身が達成感や自己有用感を味わうことができるようにする。子ども同士が互いに学び合う学習過程を大切にし，対話やタブレット端末を利用したやりとりを取り入れるなど，深い学びにつながる学習の実現を図る。
仲よく 思いやりの心をもち，礼儀正しい子 ・挨拶の意義を理解し，自ら進んで元気よく挨拶することができる子の育成	挨拶ができる子の育成	・アンケート 児童　5　地域や学校で進んで挨拶している 教職員　5　根気よく挨拶の指導をしている 保護者　5　子どもはしっかり挨拶できている 地域　2　しっかり挨拶ができている	挨拶については，児童，保護者とも「よくあてはまる」と回答した数値はやや減少しており，保護者の「あまりあてはまらない」と回答した数値が増加している。教職員は昨年同様，挨拶の指導について積極的に取り組んでおり，子どもたちの姿として現れていることを評価している。地域の方のアンケートでは，挨拶できる子どもたちを評価していただいてはいるものの，さらに，挨拶の大切さや意義を考えさせ，家庭とともに積極的に働きかける取組が必要である。	全ての児童が積極的に挨拶できるように，職員自ら進んで挨拶することで手本となるように取り組む。また，「かぎやあいさつ運動」などの従来の取組を継続して進めていく。家庭・地域との連携を更に深めるとともに，学校では，児童会や委員会の活動を工夫し，挨拶の必要性を感じられる取組を実施するとともに，その意欲の高揚を図る。	あいさつ運動に出向いた時，春より秋の方がしっかり挨拶のできる子が増えていた。学校の中では，どの児童もしっかりと挨拶ができている印象だが，知らない人には挨拶しにくいようだ。この項目について教職員の否定的な意見がなくなり，地域でも飛躍的に向上したことも評価できる。温かい学校生活，地域づくりに挨拶は欠かせない。挨拶することは，防犯，防災の観点からも重要な役割がある。家庭や地域の大人が根気よく取り組む姿勢を引き続き継続していくことも必要である。	学校生活におけるさまざまな場面や，学級活動，道徳の時間等で挨拶の大切さについて，児童が考え，実行していくことができるように伝えていく。教職員が自ら積極的な挨拶を率先垂範し，子どもたちのよき手本となるとともに，子どもたちが自然に挨拶をする習慣づくりを目指す。かぎやあいさつ運動の取組を継続し，地域との連携によってさらに挨拶のできる子どもたちの育成に力を入れる。
	思いやりの心の醸成 異学年交流(チャレンジ)活動	・アンケート 児童　6　どの友達にも思いやりのある言動をとっている。 教職員　6　いじめのない集団づくりをしている 保護者　6　いじめのない学校づくりをしている	「あてはまる」と回答した児童は，昨年度の９３．４％から９２．４％となった。「よくあてはまる」と回答した数値が児童，教職員で減少し，保護者は微増している。また，教職員，児童と保護者の数値に大きな違いがあり，その意識の差も気になるところである。異学年交流活動など，よりよい取組になるように検討しながら，道徳教育を更に充実させていく必要がある。	いじめ撲滅に向け，アンケートや教育相談はもちろんのこと，日頃の声かけを充実させ，未然防止と早期発見につなげていく。また，道徳の授業を充実させるとともに，児童会などを活用し，学校にいじめを許さない風土を醸成していく。	保護者に否定的な回答が多いのは，自分の子どもから嫌な思いをしたことなどを聞き，実態が分かりづらいために心配をしていることが一因と考えられる。保護者との密なやり取りを心がけるとともに，集団生活の中で生活することのよさを子どもたちに示しながら，道徳や福祉等の授業を大切にし，思いやりの心を育み，いじめのない学校づくりを継続してほしい。	いじめは決して許さないという強い姿勢で教職員が臨む。道徳の授業や，教育相談，毎日の声かけ等により，子どもたちとのコミュニケーションを密に行い，いじめの早期発見につなげる。保護者に対して，学校だよりやブログを通じて学校での取組について，情報発信をすすめていく。
元気で 心もからだもたくましい子 ・自他の命を大切にし，自ら安全な生活を心がけることのできる子の育成	規則正しい生活習慣	・アンケート 児童　8　規則正しい生活をしている 教職員　8　規則正しい生活を指導している 保護者　8　規則正しい生活を身に付けている	児童，保護者とも，「よくあてはまる」の回答が，昨年度を下回る結果になっている。「あてはまる」との回答については，教師は９１．６％，保護者は８６．３％，児童は７９．２％となっており，児童の行動には結びついていないと感じられる。日々の指導を再確認する必要がある。	にこにこチェックや保健だより等による啓発や指導資料の活用をして取り組んできた。教職員が常に問題意識をもち，定型化することなく，日常の粘り強い声かけ・指導を徹底していくことが大切である。また，学校保健委員会では適切な課題を設定し，よりよい生活を送ることができるように指導をしていく。	規則正しい生活を確立するためには，家庭での指導が重要である。学校から出されている，にこにこチェックは，よい取組だと思うので続けてほしい。結果を見て課題のある児童には先生から改善策を提示する，保護者に伝えるなど，有効活用していきたい。メディアに触れている時間を子も親も客観的に確認する機会を定期的に設けながら，子，親，教師が声をかけ合い，よい習慣が身に付けられるとよい。	規則正しい生活の定着を図るため，養護教諭との連携を深め，担任や児童に関わる複数の教員から働きかけができるようにする。にこにこチェックは，生活・健康に関わる児童の意識の向上のため継続して行う。また，保健だより等を活用して家庭への連絡を行い，保護者との連携をさらに強いものにしていく。
	命を大切にし，安全に生活できる子の育成	・アンケート 児童　7　安全に気を付けて生活している 教職員　7　安全に生活しようとする子を育成している 保護者　7　学校は安全に生活できるよう配慮している	児童，教職員，保護者とも，「あてはまる」の割合が９０％に近い水準を維持している。しかし，児童，教職員の回答の数値が，微減しており，校内だけでなく，登下校中のけがの数もやや目立つことから，安全に対する意識が低下することのないよう取り組む必要がある。	家庭・地域と連携を図り，不審者，地震など多様な課題に取り組む。校内では，登下校も含め，怪我や事故に対しての危機意識を高め，安全に生活できるように働きかける。また，ＫＹＴ（危険予知トレーニング）の取組を更に充実させ，できていることを認めていくなど，児童の安全意識を高めていく。	ＫＹＴ登校は，引き続き行っていくべき取組である。加木屋地区は大きな道路や商業施設ができ，転換期を迎えている。ＫＹＴ登校で児童が気付いた点を吸い上げ，家庭や地域でも共有できる仕組みを構築する等，従来どおりばかりでなく，新たな工夫も必要である。また，学校生活の中で起こりうる危険行動について，未然に防止できるよう，適時適切にＫＹＴを実施することで，より安全に学校生活を送ることができると思われる。	小学校周辺の環境が大きく変化する中でもあるため，児童の安全意識を高められるようにＫＹＴ登校の継続，拡大をしていく。不審者や自然災害など多様な状況に対応できるようにするための取組を充実させ，児童の安全意識を育てていく。地域や家庭との連携も深め，児童の安全意識の向上を図る。
地域連携 信頼される学校づくり	愛校心，郷土愛	・アンケート 児童　1　学校が好きだ 教職員　1　誇れる学校である 保護者　1　よい学校だ 地域　1　よい学校だ	「あてはまる」の回答を見ると，児童，教員，保護者，地域とも高い評価が継続しており，また，学校や児童との関わりの深い地域の方々からの評価が大きく伸びた。地域全体で学校を支えていただいている。子どもたちにとって魅力の高める学校となるよう，教職員が一丸となって学校の教育活動に努めたい。	学校生活が児童にとって楽しいものとなるように，各種活動の充実を図る。家庭や地域の学校に対する期待と信頼の高さに応えられるよう，家庭・地域とのいっそうの連携を図っていく。	アンケート結果では，よい評価を維持しているが，児童の否定的な回答が増加している。その理由を任意で聞くなどして原因を把握し，改善点を検討してほしい。また，加木屋小学校の校舎で過ごした日々，先生，友達のこと，加木屋緑地の自然，コミュニティ行事など，大人になっても大切な思い出となるような取組を大切にしてほしい。	一人一人が活躍する学級，授業，行事づくりを通して，児童が自分の居場所を見つけ，居心地よい学校となるように取り組む。また，加木屋小学校の魅力を外に向けて発信することで，地域と連携することの大切さを保護者からも子どもたちに伝えられるようにする。
	地域との連携	・アンケート 地域　3　児童が地域の活動に参加している 地域　4　地域と学校が連携している	児童の地域活動の参加について，８５．８％の方が「あてはまる」と回答し，昨年度より数値が増加した。また，地域と学校の連携については，「よくあてはまる」と回答した割合が，３１．４％から７６．２％と数値が向上している。コロナ禍前のように，地域の行事が開催され，地域どの関わりが戻りつつある。地域との連携について情報を発信するなど取組を更に充実させたい。	学校支援協議会を軸に，行事や総合的な学習などにおいて，ボランティアの方との関わりを活性化し，地域の教育力を学校教育に生かすことができるように地域へ情報発信していく。地域コミュニティとの連携を更に深め，地域と協働する学校づくりを進める。	コミュニティ行事に児童が参加できる機会が多くなり，地域活動が活発化した。地域の方々が子どもたちを大切にしてくださり，さまざまな催しものを行ってくださっていることが，子どもたちの意識に大きく影響している。ボランティア活動も拡大をさせながら，子どもたちの存在が地域と保護者の架け橋となるようにしていってほしい。	校長，教頭が中心となり，コミュニティと連携し，学校からの情報発信を継続する。学習や環境整備等のボランティアについて，その取組の様子を伝えていくとともに，社会福祉協議会とも連携を深めながら，地域の力を学校の活動に引き込んでいくことができるように工夫していく。